

「無量寿経優婆提舍願生偈註」巻上

婆藪槃頭菩薩造 曇鸞法師註解

総説分

謹んで龍樹菩薩の『十住毗婆沙』を案ずるに云く

菩薩 阿毗跋致を求るに二種の道有り。

一者難行道、二者易行道なり。

難行道者謂く五濁之世於無仏時於阿毗跋致を求るを難と為す。

此の難に乃(いま)し多途有り。粗五三を言て、以て義の意を示す。

一者・外道相善は、菩薩の法を乱る。

二者・声聞は自利にして大慈悲を障う。

三者・悪を顧こと無き人は他の勝徳を破す。

四者・顛倒の善果能く梵行を壞(やぶ)る。

五者・唯・是・自力にして他力の持つ無し。

斯の如き等(ら)の事、目に觸るるに皆是なり。

譬は・陸路の歩行は則ち苦しきか如し。

易行道者謂く。但・信仏の因縁を以(て)淨土に生(ぜん)と願ず。仏願力に乗じて便ち彼の清淨の土に往生を得。仏力住持して即ち大乘正定之聚に入る。

正定は即ち是(れ)・阿毗跋致なり。

譬ば・水路に船に乗ずれば則ち樂(しき)が如し。

此の『無量寿経優婆提舍』は蓋し上衍之極致、不退之風航なる者也

「往生論註恩徳記 住岡夜晃」より

p1 第1章 本論の解題

第1節 本論の宗教分齊

一、龍樹教判

p3 謹案 龍樹菩薩 十住毗婆沙 等

龍樹菩薩の難易二道の教判をこの「論註」の巻頭に出されるのは、教義の継承を明らかにするためである。これを特に龍樹によって述べるのはどうか。

p3 因人重法… 真理が眞理である為にはその普遍性を伝統の上に求めねばならない。龍樹菩薩はくずれていた仏法を整え、正しい道を開いた菩薩である。「讚阿弥陀仏偈」12/153

p5 依法取人… しかしこのすぐれた人格にもし念仏の業績がなければいかんともできない。龍樹菩薩には既に「十住毘婆沙論」という著作がある。天親菩薩の宗教には既に龍樹菩薩の証明がある。曇鸞大師は易行品に説かれた「法」を絶対に尊重し仰がれた故に淨土論を註解されるにあたって、これを引用される理由である。 論註下巻、不虛作住持功德

p7 曇鸞は龍樹菩薩の「十住毘婆沙論」に説く法によって、天親菩薩の宗教の裏付けをせんとするのである。

p12 求阿毘跋致… 所求の位を挙げ 阿毘跋致…不退転、二乘に退墮しないという意味 阿毘跋致の正位は無生法忍を得るにある

p15 難行道 この一段は総じて難の姿を示す。

『十住毘婆沙論』易行品の中に難相を示すに二あり。

1, 転進の難

修行の難「行諸難行」時効の難「久乃(すなわち)可得」
この二つは共に進趣(行を修して進むこと)に約す。

2, 敗壞の難

阿惟越致品第八に七種の敗壞の相を明かしてある。

- ① 志幹有ること無し ② 好みて下劣の法を樂う ③ 深く名と利養に着す
- ④ 其心端正ならず ⑤ 他家を吝護す ⑥ 空法を信樂せず ⑦ ただ言説を貴ぶ

五難

p20 一者・外道相善は、菩薩の法を亂る。

仏教以外に外側だけ、形式的なものを整えて、あたかも深い善であるようにみせかけておるものが
沢山あって、仏法を修行していくということが非常に困難になっている。相善、姿形をとって、きち
んと生活をする、有相の善。そういうものに振り回される。細正 9p147

p24 二者・声聞は自利にして大慈悲を障う、大慈悲を仏法の根本とする限り、大悲を行ぜざるもの
は菩薩の死である。

p25 三者・惡を顧こと無き人は他の勝徳を破す

例「乞眼縁」の話 p26

一、二、三、の難は五濁の世にある凡夫、二乗の難であって浄土にはない。 p28

p28 四者・顛倒の善果能く梵行を壞す。 顛倒の善果とは、不実功德をいう。顛倒の善果を求める
心が敗壞の難である。

p29 五者・唯・是・自力にして他力の持つ無し

難行道というものは、理想を打ち立てて自分で頑張っていこうという。他から指導し、援助し励ます
というものが無い。これを自力という。「唯これ自力」、これが本当に進展を遂げない。難行道で終っ
てしまう。行きつ戻りつで終ってしまう。卵がどんなに頑張ってみてもひよこになる事はできない。自分
で熱を出そうとすると難行道で終ってしまう。ふ化する熱は必ず他から与えられなくてはならな
い。他力の持つ無しとは、衆生は罪業の因縁のために仏に値えない。あるいは瞋恚を生じ、或いは
誹謗を起こす。 p31

斯の如き等(ら)の事、目に觸るるに皆是なり。

譬は・陸路の歩行は則ち苦しきか如し。

p36 一、易行道

p38 **信仏の因縁**

この語について「原要」は二種の読み方をだしている。

(ア) 信仏の因縁と、「信」と「仏」とを連続する読み方

(イ) 「仏の因縁を信ず」と、「仏因縁」と三字を連続する読み方で、「論註」に「第一義
諦とは仏因縁法なり」というのがこれである。

「仏の因縁を信ず」ということについて三重の義がある p39

- ① 唯本に訳す ② 本末に訳す ③ 唯末に訳す

願生浄土 乘仏願力 便得往生彼清浄土

p42 従本向末 大乘正定聚

p43 譬如水路乗船

p45 問答

現代は難行道自力の到達しがたいことを明らかにした人は龍樹菩薩であった。龍樹菩薩という人の
仕事は、易行道を明らかにすることであった。それが仏教の目的を達成するたった一つの道である
事を明らかにされた。

その易行道というのは何か。それは但信仏の因縁、仏の本願を信知する。即ち私にかけられている大きな願い、仏の本願が本当にわかること、そこにたった一つ大きな世界に入る道がある。それを易行道といっている。

仏の本願というのは何か。念我…われを憶え。 称名…わが名をよべ 自帰…われにかえれ それを本当に信知する。そこに易行道が展開する。そこが不退の位である事を先ず龍樹はおっしゃった。この天親菩薩の「無量寿経優婆提舍願生偈」は「蓋し上衍之極致」、大乘の至極、不退之風航、不退に入る帆掛け船、大きな船であると言われた。

天親と龍樹の共点、「十住毘婆沙論」と「浄土論」の共通点、それは本願を信じて念仏申して不退転の位に至る、そこが全く共通している。天親菩薩も龍樹菩薩も説かれるところは一つである。

毘婆沙…毘婆沙とは、経文が読み難い時、これを分かりやすく書き改めた文章。読み難いとは、鈍根懈慢の人々は、理解力が不足し、長い文章やむずかしい文字、理解し難い内容などが沢山あると、経が読めず実行もでき難い。この人々のため、文字を吟味し、譬えをひき、歌やまとめをつくって理解を助ける事を「毘婆沙」をつくとっている。細十 p 52
十住毘婆沙論の造意… 鈍根懈慢、愚鈍で不精進、しかも憍慢であって、到底「十地経」にあるような行のできない人、したがって自分の力では全く十地、(菩薩の修行位階が十段階に分け説かれてゆく、不退転地を初地という) に入りえない庶民大衆のためにこの論を説くのであると龍樹は繰り返している。「十住毘婆沙論」は現実に生死海に生死流転している庶民大衆という存在に対し、これを救いたい一念で書かれたもの。細十 p 51

東p165 島 12/13(易行品)また曰わく、仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなわち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しきがごとし菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもって疾く阿惟越致に至る者あり。乃至 もし人疾く不退転地に至らんと欲わば、恭敬心をもって執持して名号を称すべし。もし菩薩この身において阿惟越致地に至ることを得、阿耨多羅三藐三菩提を成らんと欲わば、当にこの十方諸仏を念ずべし。名号を称すること、『宝月童子所問経』の「阿惟越致品」の中に説くがごとしと

易行品のこの文が出る前に龍樹の呵責というのが出ている。道を成ずる為に諸・久・墮という三つの難点がある。私は形ばかりの苦であって、遂に途中で墮ちこんでしまい、或いは行きつ戻りつで一生涯終るかも知れない。どうか早く道を成就したい。その道はないかと問う。その問いに対する厳しい呵責が出ている。丈夫志幹の言に非ず。めめしい、女性的発想である弱い卑劣と。その呵責が2回繰り返される。その最後に言われるのが「汝もし必ず聞かんと欲すれば、今まさにこれを説くべし」と説きだされるのが、易行品の本文。細 正 7p243

菩提心の成立は不退の位においてなされる。それが信の成立。女性的性格の脱却は本願成就による。十住論の易行品は本願成就の心を表そうとしている。十住論の各章は大體華嚴経十地品を順を追って解釈してある。しかし易行品に相当する所はない。そこは大無量寿経の本願成就文の解釈である。それしか信の成立はないのである。

本願成就文、諸有衆生(聞其名号の座) 聞其名号(十方十仏章・弥陀章)信心歓喜乃至一念この心を表すのものが易行品。十方十仏章、弥陀章で聞其名号ということと言われる。p244
聞其名号、十方衆生諸仏の称えられる弥陀の名号、則ち本願の名告りを聞き開くしか不退の位に入る道はない。しかしその十方衆生の諸仏のたたえられる名告を聞くには諸有衆生という座がなければならぬ。その座り場所、居り場所がはっきりしないと聞其名号が成り立たない。十方諸有衆生、全

での迷い深い、女性的性格、弱さ、卑劣さ、すぐに哀れみをこうて助けてくれという、そういう自分に目が覚める所に、難行道というものの意味がある。難行道の果てにこういう自分の座を発見する。場所がはっきりすると十方衆生の諸仏の勧め励ましが聞こえ来ようになっている。それを易行品という。

難行と易行p249

大論では、未だ無生法忍を得ざれば、難行にして陸路の如し、無生法忍を得終らば、易行にして水路の如し、といわれている。無生法忍というのは大体信心ということ。信心を獲るまでが難行。

或いは信方便の易行を以って疾く阿惟越致に至る者有り 12/13

信即方便p255

如来のその世界の彼方からわたしに方便回向されるものが信方便。信方便というところに大きなものはたらきかけがある。それを信仏の因縁という。

12/16

南無阿弥陀仏が、信方便の易行である。p262

龍樹菩薩の難行道・易行道。難行道とは五濁の世の無仏の時に、素手で不退転をを求める事。易行道とは「謂但信仏の因縁を以って」本願を信じて念仏を申すという因縁を頂いて、浄土に生まれんと願するならば、仏の願力に乗じて便ち彼の清浄の土に往生することを得しむ。仏力住持して、即ち大乘正定聚に入らしむ。細正9 1 3 3

疑問点

- 1、浄土論の注釈をされるにあたって、なぜ「謹按龍樹菩薩十住毘婆沙」とあるのか。
- 2 十住毘婆沙論ではなく十住毘婆沙なのか
- 3 易行品に難行、易行とはあるが、難行道、易行道とはないと思う（敗壞の菩薩の請は易行道）。道とつけられた曇鸞大師のお心は
- 4、五濁の世、無仏の時だから不退転を求めるのが難とおさえられるところ、
- 5、自力にして他力の持つなし、とは
- 6、かくの如きらの事、とは
- 7、恩徳記の第一章本論の解題の所で、易行品にはあまり出ていないと思う。仏道を求める「難」について詳しくのべられる。内容が難しくよくわからないけれど。それに対する仏のはたらき易行道が展開される。このあたりを頂く事が、論註をまなぶ課題ではないかと思いました。易行に方便とつけられているおこころも頂きたい。

1. 真宗聖教全書の文章（279頁の終りから2行目～281頁始めから6行目）

「无量壽」是安樂淨土如來別號。釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國、於大衆之中說无量壽佛莊嚴功德。卽以佛名號爲經體。後聖者婆數槃頭菩薩、服膺一升反R如來大悲之教傍經作願生偈。復造長行重釋。梵言「優婆提舍」此間无正名相譯。若舉一隅可名爲論。所以无正名譯者、以此間本无佛故。如此間書、就孔子而稱經。餘人制作皆名爲子。國史・國紀之徒各別體例。然佛所說十二部經中有論議經、名優波提舍。若復佛諸弟子解佛經教與佛義相應者、佛亦許名優波提舍。以入佛法相故。此間云論、直是論議而已。豈得正譯彼名耶。又如女人於子稱母、於兄云妹。如是等事、皆隨義名別。若但以女名汎談母妹、乃不失女之大體、豈含尊卑之義乎。此所云論亦復如是、是以仍因而音存梵音曰優波提舍。此『論』始終凡有二

重。一是總說分、二是解義分。總說分者前五言偈盡是、解義分者「論曰」已下長行盡是。所以爲二重者有二義。偈以誦經。爲總攝故。論以釋偈。爲解義故。

「無量壽」者、言无量壽如來。壽命長遠不可思量也。「經」者常也。言安樂國土佛及菩薩清淨莊嚴功德國土清淨莊嚴功德、能與衆生作大饒益。可常行于世故名曰經。「優波提舍」是佛論議經名。「願」是欲樂義。「生」者天親菩薩願生彼安樂淨土如來淨花中生。故曰願生。「偈」是句數義、以五言句略誦佛經故名爲偈。譯「婆數」云天。譯「槃頭」言親。此人字天親。事在『付法藏經』。「菩薩」者、若具存梵音應云菩提薩埵。菩提者是佛道名。薩埵或云衆生、或云勇捷。求佛道衆生有勇猛健志故名菩提薩埵。今但言菩薩譯者略耳。「造」亦作也。庶因人重法故云某造。是故言「无量壽經優波提舍願生偈婆數槃頭菩薩造」。解『論』名目竟。

2. 「易行品・往生論註學習ノート」の文章

往生論註卷上（淨土論大綱）（2頁9行目～3頁終りから2行目）

無量壽はこれ安樂淨土の如來の別号なり。釈迦牟尼仏、王舍城及び舍衛国に在して、大衆の中にして無量壽仏の莊嚴功德を説きたまへり。すなわち仏の名号をもって經の体となす。

後の聖者、婆數槃頭菩薩、如來大悲の教を服膺して、經に傍へて願生の偈を作れり。また長行を造って重ねて梵言を釈す。優婆提舍はこの間に正名相訳せるなし。もし一隅を挙げて名づけて論となすべし。正名訳せることなきゆえは、この間にもと仏無さざるをもってのゆえなり。この間の書のごときは、孔子につきて經と稱す。余人の製作みな名づけて子となす。国史・国紀の徒、各別体例然なり。仏の所説、十二部經の中に論議經あり、優波提舍と名づく。もし仏の諸の弟子、仏の經教を解して仏義と相応すれば、仏また許して優波提舍と名づく、仏法の相に入るをもってのゆえに。この間には論という、ただこれ論議而已と。あにまさしくかの名を訳することを得んや。また女人を子において母と稱し、兄

において妹というがごとし。かくのごとき等のこと、みな義に随いて名別なり。もしただ女の名をもってひろく母妹を談ず、すなわち女の大体を失せず、あに尊卑の義を含まんや。このいうところの論またかくのごとし。ここをもって仍（因なり）梵音を存して優波提舍という。

この論の始終に凡そ二重あり。一はこれ総説分、二はこれ解義分なり。總説分とは前の五言の偈尽くるまでこれなり。解義分とは論曰以下長行尽くるまでこれなり。

二重とするゆえは二義あり。偈は誦經をもつて総撰するがゆえに、論は釈偈をもつて解義とするがゆえなり。

無量壽とは、言は無量壽如来の寿命長遠にして思量すべからざるなり。經とは常なり、言は安樂国土の仏および菩薩清淨莊嚴功德・国土清淨莊嚴功德、能く衆生のために大饒益を作す。つねに世に行わるべきがゆえに名づけて經という。**優波提舍**はこれ仏の論議經の名なり。

願はこれ欲樂の義なり。生は天親菩薩かの安樂淨土に生ぜん願ず、如来淨華の中に生ずるがゆえに願生という。**偈**はこれ句数の義、五言の句をもつて略して仏經を誦するがゆえに名づけて偈となす。**婆數**を訳して天という、**槃頭**を訳して親という。この人を天親と字くることは『付法藏經』にあり。**菩薩**は、もし具さに梵音を存せば菩提薩埵というべし。菩提はこれ仏道の名なり。薩埵あるいは衆生という、あるいは勇健という。仏道を求むる衆生、勇猛の健志あるがゆえに菩提薩埵と名づく。いまだ菩薩というは訳者の略せる耳。**造**はまた作なり。人に因つて法を重んずることを庶うがゆえに某造という。このゆえに**無量壽經優波提舍願生偈婆數槃頭菩薩造**といえり。論の名目を解し竟んぬと。

3. 主な言葉の意味（「易行品・往生論註学習ノート」の文章）

（住岡夜晃先生の往生論註恩徳記を寺岡一途氏がまとめられた資料に寄る）

○「服膺（ふくよう）」

服とは着の義、従う義。膺とは胸也。奉持して之を心胸の間に著けること、信受奉行、胸につけて失わぬを云う。又、服従であり、行である。

○正名相訳せるなし

即ち彼の西天に比して此の東漢には適当な訳語なきを示す。

○この間の書

「如此間書」等。「此の間の書」とは俗典をいう。俗典においては『六經』（易經、書經、詩經、春秋、私記、樂記、又、時に私記を除き周礼を加えてもいう）の如く孔子の書を『經』と言ひ、老・壯・揚・墨・荀・孟の如きは『子』と言ふ。「国史国紀之徒」とは、史官が天子の言動を記録するを「国史」と言ひ野史の国事を記録するを「国紀」と言ふ。以上、經、子、史、紀と提擲が別であるのを各別体例という。

○經

○国史・国紀

老・壯・揚・墨・荀・孟の如きは『子』と言う。「国史国紀之徒」とは、史官が天子の言動を記録するを「国史」と言い野史の国事を記録するを「国紀」と言う。以上、経、子、史、紀と提擲が別であることを各別体例という

○また女人を子において母と称し、兄において妹というがごとし。かくのごとき等のこと、みな義に随いて名別なり。もしただ女の名をもってひろく母妹を談ず、すなわち女の大体を失せず、あに尊卑の義を含まんや。

「女」の名は『論』に比し、尊卑は『師資の説』にたとえる。「汎」とは緩慢なるを言う。「女」の言を以て汎く「母妹」を言わば、女の大体は失はざるも、母妹の意味は現れない。

○ここをもって仍（因なり）

「この云う所の論もまたまた是の如し」と言い、「ここを以てなお梵音を存して優婆提舎という」と結ぶ。「仍」は音、ジョウ、ニョウ、ヨル、転じて「ナホ」と訓む。

○大饒益

4. 疑問点と感想

- 1) 2頁9行目「無量寿はこれ……」とあり、4頁1行目「無量寿とは、言は……」とあるが「は」と「とは」の違いは何か？最初は語句の説明で次は意味の説明だからか？
- 2) 2頁終りから3行目のからの『「優婆提舎」はこの間に正名相訳せるなし。もし一隅を挙げて名づけて論となすべし。正名訳せることなきゆえは、この間にもと仏無さざるをもってのゆえなり。』の「この間にもと仏無さざるをもってのゆえなり。」
「中国には仏無さざる」というのは言い過ぎではないのか。そういう概念がなかっただけで仏はましましていたのでないかと思うが？概念がなかったら無いのか？無いことと無いに等しいのは違うのではないか？
- 3) 3頁始めから6行目の「また女人を子において母と称し、兄において妹というがごとし。かくのごとき等のこと、みな義に随いて名別なり。もしただ女の名をもってひろく母妹を談ず、すなわち女の大体を失せず、あに尊卑の義を含まんや。」
ここも「なるほどと思えない」というかよく解からない。

未完、続く、以上。

五念門配釈と第一行「世尊」釈

山口班 林 典子

1 願生偈の五念門配釈

○本文

「偈の中に分けて五念門と為す。下の長行に釈する所の如し。

第一行の四句に相含んで三念門有り。上の三句は是れ礼拝・讚嘆門なり。下の一句は是れ作願門なり。

第二行は論主自ら我れ仏經に依って論を造って仏教と相応す。服する所宗有ることを述ぶ。何が故ぞと云うならば、此れ優婆提舍の名を成ぜん為の故なり。亦是れ上の三門を成じて下の二門を起こす。所以に之に次いで説けり。

第三行より二十一行尽きるまでは是れ觀察門なり。

最後の一行は是れ回向門なり。

偈の章門を分かち竟りぬ。」

○意訳

偈の中を分けて五念門とする。あとの長行に説明してあるとおりである。まず第一行の四句には三念門が含まれている。上の三句は礼拝門と讚嘆門であり、下の一句は作願門である。

第二行は論主自ら、私は仏の經に依って論を造り、仏の教えに応え、ともに同じ世界をひらくのであると述べられるのである。

なぜこういわれたかといえ、優婆提舍という題目を充分なものにするためである。それと同時に上の三門を全うし、下の二門を呼び起こそうとしている。だから第一行に次いで説かれるのである。第三行より廿一行をかぞえるまでは、觀察門である。

最後の一行は回向門である。。

以上で偈の章の部門わけをおわる。

2 第一行「世尊」釈

○本文

「世尊、我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命して安楽国に生まれんと願ず。

世尊は諸仏の通号なり。智を論ずれば則ち義として達せざること無し。断を語らば則ち習気余無し。智断具足して能く世間を利す。世の為に尊重せらる。故に世尊と曰う。

此の言う意は釈迦如来に帰したてまつるなり。何を以てか知るを得となれば、下の句に我依修多羅と言われればなり。天親菩薩、釈迦如来の像法の中に在して釈迦如来の經教に順ず。所以に生ぜんと願ず。願生に宗あり。故に知んぬ、此の言は釈迦に帰したてまつるなり。

若し此の意を謂うに、遍く、諸仏に告ぐこと亦復嫌うこと無けん。夫れ菩薩は仏に帰す、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動静己に非ず、出沒必ず恩を知って徳に報ずるに由るが如し。理宜しく先ず啓すべし。又所願軽からず。若し如来威神を加したまわすば、まさに何を以てか達せんとする。神力を加えんことを乞う。このゆえに仰いで告ぐるなり。」

○意訳

世尊 我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命して 安楽国に生まれんと願ず

世尊とは諸仏に共通する呼び名である。その智慧についていえば、あらゆる道理に通達し、迷いを断つという点では、煩惱の余習さえとどめていない。このように智と断とが完全にそなわって、よく衆生を利益し、世のために尊重すべきものとして尊ばれる。だから世尊というのである。ここで世尊といわれるのは釈迦如来に帰依する意味である。どうしてそう分かるかという、下の句に「我れ修多羅に依る」といわれているからである。天親菩薩は釈迦如来の像法の世にあって、釈迦如来の経の教えにしたがえばこそ往生を願われた。その往生の願いにはもとづくところがあるのである。だからこの世尊ということばは、釈迦如来に帰依する意味だとわかるのである。

ところで、この意味をおもってみると、ひろく諸仏に告げたと解することもまたさしつかえない。だいたい菩薩が仏に帰依するのは、あたかも孝子が父母に帰服し、忠臣が主君に帰服するようなもので、たちいふるまいに私がなく、進退すべて仏意にのっとり恩を知り、徳に報いるのである。だからまず最初に申し上げなければならないのである。また天親菩薩の願われるところは深く重い。もし如来が不可思議な威力をお加えにならなかつたら、どうしてその願いを達成することができようか。だから今、如来の不可思議の力をくわえられんことを願って、世尊と呼びかけたてまつったのである。

意訳 「解説浄土論註」東本願寺出版部より参照

曇鸞が「願生偈」に五念門の行を配当されたということで、まず五念門ということが知識として聞いたことはありましたが、いきづまりました。そこで

「講讃浄土論註」延塚知道先生 を読ませていただきました。

「だからみなさん、ただ口で念仏申すを称えたらいいのではないことを、よく考えてみてください。本当に念仏を実践する。念仏者になることは、五念門の生活を送らなければならぬことになります。

本当に頭を下げるものを持っていますか（礼拝）

本当に褒めるべきものを持っていますか（讃嘆）

そしてどう転んでも帰っていく場所がはっきりしましたか（作願、観察）

人につえるべきことは、そのこと一つではありませんか（回向）

こういうことを曇鸞は教えてくださっていることになります。

だから、「南無阿弥陀仏」を私たちは称名念仏といいますが、その称名念仏の中にはこういう大切な生活が含まれているのだということを教えているのです」

五念門の 「門」ということがずっと気になっていました

「宮城顛選集」第16卷浄土論註聞記1

「門というのは、一口でいまして入口です。中にはいろいろとするものが、必ず通らなければならない入口が門です。ですから門を見いだすまでは、その歩みは右往左往なのです。歩みに方向と意味をあたえるのが門です。いふなれば、門から門にいたるのが道です。路というのは、迷路、露路という言葉に使われる。これは迷いの路であり、行き止まりの路です。それに対して、門にいたるといふところに道の成就があります。

そして、門のはたらきには開閉ということがある。つまり、そこになにを入れ、なにを入れないかという選びです。入れるものと入れないものを選びわけるといふところに、門のはたらきがある。そして、そのことによって、中の世界がどういふ世界かを、外に向かって表現するわけです。・・・

門というのはどこまでも、家の内から外に向かって開かれるのが門なのです。外にいるものが外から開くのは、これは打ち破るのであって門ではない。門は、内にいるものが外に向かって、外にいる人に呼びかけるのが門なのです。家から外に向かって開かれるものなのです。門という言葉には本来、外にいる人に呼びかける、あるいは外にいる人の求めに応えるという意味がある。それで、門という言葉によって、回向ということが表現されるわけです」

「門」ということについて、まだまだ考えていきたいと思ひます ありがとうございます

(発表20240524) 山口班 熊谷眞由美

※聖典は東本願寺出版

『易行品・浄土論・往生論註ノート』山口聖典研究会編 監修 深川倫雄 発行永田文栄堂
二〇〇九年第三刷発行

無量寿経優婆提舍願生偈註 卷上

六頁十行から七頁十一行まで担当

我一心とは、天親菩薩自督 督の字勤なり 率なり正なり の詞なり。言は無碍光如来を念じた
てまつつて安楽に生ぜんと願すること、心々相続して他の想い間雑することなしとなり。

問うていわく。仏法の中には我なし。この中に何をもってか我と称するや。

答えていわく。我というに三の根本あり。一にはこれ邪見語、二にはこれ自大語、三にはこ
れ流布語なり。いま我というは、天親菩薩自らこれを指しうる言なり。流布語を用いる、邪
見と自大とに非ざるなり。

帰命尽十方無碍光如来とは、帰命はすなわちこれ礼拝門なり。尽十方無碍光如来はすなわち
これ讃嘆門なり。何をもってか知るとなれば、帰命はこれ礼拝なりと。龍樹菩薩の阿弥陀如
来の讃を造れる中に、あるいは稽首礼といい、あるいは我帰命といい、あるいは帰命礼とい
えり。

この論の長行の中にまた五念門を修すといえり。五念門の中に礼拝これ一なり。
天親菩薩すでに往生を願す。あに礼せざるべけんや。ゆえに知んぬ、帰命はすなわちこれ礼
拝なり。しかるに礼拝はただこれ恭敬なり、必ずしも帰命に不ず。帰命は必ずこれ礼拝なり。
もしこれをもって帰命を推せば重しとなす。

偈は己心を申ぶ。よろしく帰命というべし。論は偈の義を解す、ひろく礼拝を談す。彼此相
成じて、義において弥よ顕れたり。 (ここまで熊谷)

親鸞聖人引用文「教行信証」(行巻)

〔『真宗聖典〔第二版〕』「教行信証(行巻)」一八二頁 (※初版聖典一六八
頁)

「我一心」(論) は、天親菩薩の自督の詞なり(⑦「督」の字 勤なり。率(ひく)なり、正な
り。・・・)言うところは、無碍光如来を念じて安楽に生まれんと願す。心心相続して他想像
雑無し。乃至

「帰命尽十方無碍光如来」(論) は、「帰命」は即ち是れ礼拝門なり。「尽十方無碍光如来」
は即ち是れ讃嘆門なり。何を以てか知らん、「帰命」、是れ礼拝なりとは。龍樹菩薩、阿弥陀
如来の讃を造れる中に、或いは「稽首礼」(易行品)と言ひ、或いは「我帰命」(同)と言
ひ、或いは「帰命礼」(同)と言えり。此の『論』の長行の中に、亦「五念門を修す」(論)
と言えり。五念門の中に礼拝は是れ一なり。天親菩薩すでに往生を願す。豈に礼せざるべけ

んや。故に知りぬ、「帰命」即ち是れ礼拝なりと。然るに礼拝は但是れ恭敬にして、必ず帰命ならず。帰命は是れ礼拝なり。若し此れを以て推するに、帰命（「命」の字 眉病の反し。使なり。教なり。道なり。信なり。計なり。召なり。）は重とす。偈は己心を申ぶ、宜しく「帰命」と言うべし。『論』に偈義を解するに、汎く礼拝を談ず。彼此相成す。義に於いて弥いよ頭れたり。

■「我一心とは、天親菩薩自督 督の字 勸なり 率なり 正なり の詞なり。言は無碍光如来を念じたてまつって安楽に生ぜんと願すること、心々相続して他の想い間雑することなしとなり。」

訳・天親菩薩が自己の信心を述べたことばである。すなわち無碍光如来を念じて安楽国に生まれようと願い、その心が止むことなく相続し、他のいかなる想いもまじわらない心相をいう。（『浄土論註』（大蔵出版）七四頁）

○「世尊、我一心に尽十方無碍光如来に帰命し、安楽国に生まれんと願いたてまつる。」と、その領解を教主世尊に向かって表白せられた。この世尊我一心帰命のみ言を頂いて、聖人は信巻別序において、浄土論を、「特に一心の華文を開き」とたたえられた。なぜならば、この論主の一心こそ、本願の三心の領解の基調となったからである。

（『不退転の歩み』住岡夜晃選集第三卷昭和四六年発行 二〇三頁）

○かくて、本願の信樂は、行者自力の発起するところではなく、深く如来至心の清浄真实、如来回向の正直の心に根拠するところの信樂である。故に、虚仮無雜、邪偽無雜の真实清浄の信心である。「信樂は即ち是れ一心なり」。機受につけば誠に一心である。本願三心機受一心、すなわち信樂である。「一心は即ち真实信心なり」。これは信樂を一心、一心を真实信心と御転釈である。真实信心と言うは善導の『往生礼讚』に出る。これはもと『大経』の本願成就文に、信心歡喜乃至一念と出る。それによって、論主は一心といわれ、更にこの論主の一心を真实信心という。信樂というは、真实信心の一心であると示し、「是の故に論主建に一心と言へるなり知るべし」。この文は『浄土論註』の讚嘆門の釈文である。今はそれを用いて結釈せられる。以上の如く、合三為一の趣あり、故に論主は、「願生偈」の建章に、世尊我一心と告白されたのである。三心即一心の義趣「応知」（知るべし）といわれるのである。

（『新住岡夜晃選集五』二〇四頁）

○天親菩薩が「我一心に」と言われた。この人は自分をあまり語らない。非常に頭のいい人で、文は簡潔で、あまり喩を引かない。・・・その人がこの書では「我」というのを打ち出し「我一心に」と言う。専門家が「あつ」というぐらいの驚きの書物だというのはこういう点かも知れない。・・・自己自身が「一心」「願生」そして「普く衆生と共に」と願っていく、そういう自分の歩みを書いている。天親には他にこのような書物はないのであろう。

（『回向の宗教』細川巖述 七五頁）

○「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」のこの「世尊」は不要じゃないか、「我一心に尽十方無碍光如来に帰命したてまつる」、純粹な信心は如来が対象であって世尊は必

ずしも要らないような気がするが、ここには世尊が最初に出ている。この「世尊」という言葉に曇鸞は非常にうたれたと思う。・・・「世尊よ」という中に天親菩薩の知恩報徳、「釈尊よあなたのおかげで私はようやく一心帰命の信を賜り、願生彼国の身となりました。ありがとうございました。」そういう心がこもっている。（『回向の宗教』細川巖述 九十三〜四頁）

■問うていわく。仏法の中には我なし。この中に何をもちてか我と称するや。

訳・問うていう。仏教では無我を説き、我をたてない。いま、この文の中で、なぜ「我れ」というのであるか。答えていう。「我れ」という場合に三つの語義がある。第一は、我という実体をたてて執られるところの邪（よこ）しまなことば。第二は、みずからおごり高ぶっていう尊大のことば。第三は、世間で一般に使われる自他を区別することばである。いま「我れ」というのは天親菩薩自身を指すことばで、第三の、流布語を用いており、第一、第二の邪見語や自大語としてではない。（『浄土論註』（大蔵出版）七四頁）

○仏教は無我である。無我とは自己を空しうして、全我を捧げて生きることではあるが、。。大無量寿経に言く「大光明を奮ひ、魔をして之を知らしむ。魔、官属を率いて逼試す。制するに智力を以ってし、皆降伏せしむ。」と。願わくば智力よ来って、我の根本をつきたまえ。

（『闡光録上』住岡夜晃著七六頁・八九頁）

○憶うに、本願の三信は既に述ぶるが如く、如来大悲誓願のこれよりほかに途なき必然の表現である。その表現がやがて行者の為に回向となるためには、衆生は、大悲本願を領解しなければならぬ。衆生の機の上に領解せられてはじめて救済の事実となるのである。今の論主の一心は、論主の領解の告白である。（『新夜晃選集五』一八六頁）

■帰命尽十方無碍光如来とは、帰命はすなわちこれ礼拝門なり。尽十方無碍光如来はすなわちこれ讚嘆門なり。何をもちてか知るとなれば・・・

訳・なぜ「帰命」を礼拝門に配するかというところ、龍樹菩薩が阿弥陀如来を讚える偈を詠んだなか、「稽首して礼したてまつる」とか、「帰命して礼したてまつる」とあるからである。また、この『浄土論』の偈の終わった散文の部分に、「五念門を修める」といってこれを説明し、礼拝は五念門の一つに数えられている。天親菩薩はすでに往生を願っておられるのであるから、礼拝されないはずはない。それ故「帰命」は礼拝に外ならない。ところが、礼拝は尊敬をあらわすもので、必ずしも帰命のこころを示すとはいえない。ところが帰命は必ず礼拝をともしなう。この点から考えれば礼拝よりも帰命の意義が重いと見える。したがって、偈文において菩薩自身のところを表明しているから、「帰命」と表現すべきである。散文の論釈では偈の意味を解釈するから広く「礼拝」としたのである。こうして偈文と散文の論釈とが互いにたすけあつて、「帰命」の意味を明らかにしている。（『浄土論註』（大蔵出版）七六頁）

○衆生の領解が真実に成立して、はじめて如来の廻向は廻向となったのである。：印度の龍樹菩薩の十住論、天親の浄土論が生まれ・・・曇鸞の論註、道綽の安樂集、善導の観經四帖疏が作られ、日本に來たつて源信の往生要集、法然の選択集となり、ついにわが親鸞聖人の教行信証が生まれた。・・・教法は領解せられなければならない。・・・領解は歴史的に展開され、こ

の領解と展開を通して教法は歴史的に人を救っていく。しかもそのままが大悲廻向なのである。
(『不退転の歩み』住岡夜晃選集 二〇一頁)

感想・

「心々相続して他の想い間雑することなし」ということを「無碍光如来を念じて安樂国に生まれようと願い、その心が止むことなく相続し、」というふうに訳してあります。心々相続という事がまずどういうことなのか尋ねてみましたら、夜晃先生の『恩徳記』の一三四頁に「無疑無雜の心よく一生を貫徹するが故に心心相続という。・・一心はすなわち相続である。」とあり、また、「次の心も次の心も同じく無碍光如来を念じ安樂国に生ぜんと願するばかりの心。」と以前ご法座でお聞かせいただきました。

親鸞聖人の『教行信証』には、

「信に知りぬ、「至心」「信樂」「欲生」、その言異なりといえども、その意これ一なり。何を以てのゆえに、三心すでに疑蓋雜わること無し。かるがゆえに眞實の一心なり、これを「金剛の真心」と名づく。金剛の真心、これを「眞實の信心」と名づく。眞實の信心は必ず名号を具す。名号には必ずしも願力の信心を具せざるなり。この故に論主、建に「我一心」と言えり。」「『教行信証』信卷二三五頁」とあり、我一心の背景が至心信樂欲生にあると述べられています。眞實の信心は必ず名号を具す。名号には必ずしも願力の信心を具せざるなり。これが礼拝と帰命の関係のように思いました。

親鸞聖人の『尊号眞像銘文』に。

「世尊我一心といふは、「世尊」は釈迦如来なり。「我」ともうすは、世親菩薩の、わがみとのたまへるなり。「一心」といふは、教主世尊の御ことのりをふたごころなくうたがいなしとなり。すなはちこれまことの信心なり。」
(『尊号眞像銘文』

お東聖典初版五一八頁)

「世尊は釈迦如来なり。」「我ともうすは、世親菩薩のわがみとのたまえるなり」「一心といふは、教主世尊の御ことのりをふたごころなくうたがいなし」とあります。「わがみ」ということを通して頂くのがお釈迦様の教えであるということだといただきました。我と一心が離れないと。

「教法は領解せられなければならない」と夜晃先生の言葉にありますように、わが身とおして、尋ねていくこと。そこには必ず礼拝があり、浄土を願うところにこの世を生きる生き方が開かれるのだと。そういう確かめを今回の御縁でさせていただきました。有難うございます。

担当範囲は、「聖教全書」では、282頁後2行から284頁3行まで。山口聖典研究会編の「易行品・浄土論・論註ノート」では、7頁12行から10頁5行まで。

・はじめに…担当範囲までの大まかな流れ

曇鸞師は、天親菩薩自らが偈の義を明かされた長行の文によって、偈を五念門に配当し、願生偈の第一行「世尊我一心 帰命盡十方 無碍光如来 願生安楽国」の中に相含みて三念門あり。上の三句はこれ礼拝・讃嘆門なり。下の一句はこれ作願門なり。と註釈される。

「相含みて」と表現されているように、礼拝・讃嘆・作願がバラバラにあるのではなく関連しており「我一心」を開かれたものである。

「我一心とは、天親菩薩自得の詞なり。^{いうこころ}言は無碍光如来を念じたてまつって安楽に生ぜん願ずること、心心相續して他の想い間雑することなしとなり」と註釈される。

そして、偈の二句、三句の「帰命盡十方 無碍光如来」の帰命は礼拝門、盡十方無碍光如来はこれ讃嘆門なりと抑えていかれる。

・担当する範囲は、どのようなことが書かれているのか。

1. 讃嘆門について

○先ず、「何をもってか**盡十方無碍光如来**はこれ讃嘆門なりと知るとなれば……」の言葉から始まる。

(私案) ここを読むまでは天親菩薩が「**盡十方無碍光如来**」と表現していることに何の疑問も生じてなかった。往生論註恩徳記で、「弥陀の御相好は『観経』には「仏身の高さ六十万億」と現せども、その外になし。論主、今、「盡十方無礙光如来」と現したもう。」との文を目にしてこれが天親菩薩独自の表現であることを教えられた。

長行の礼拝門のところでは天親菩薩は「いかなるか礼拝。身業に阿弥陀如来・応・正遍知を礼拝したてまつる」と言っており、「盡十方無碍光如来」とは言っていない。はて？と思うところであるが、その註に「諸仏如来の徳に無量あり。徳無量なるがゆえに徳号また無量なり……」と曇鸞師は釈してくれてある。また、続いて「如来」、「応供」、「正遍知」の註釈がなされている。(聖全 271頁)

その内容から、我が身が如来のはたらきの中にあり、そのはたらきを受けつつある、彼の如来を「盡十方無礙光如来」と呼ばざるを得ない感動が天親菩薩にあったのだろうかというのが私の素朴な感想である。

○次に、曇鸞師が偈に五念門を配当するときに、帰命の対象(所帰)の「**盡十方無碍光如来**」が讃嘆門であると抑えていく根拠が示される。

先ず、天親菩薩自らが讃嘆ということ釈している長行の文を挙げられる。

「**いかなが讃嘆門、いわく、かの如来の名を称し、かの如来の光明智相の如く、かの**

名義の如く、実の如く修行し相応せんと欲うがゆえなり。」（聖全 271 頁） *注 1

*注 1 この文の註釈は、下巻にある。（聖全 314 頁）、先で学ぶ内容とは思いますが、一応読んでおく必要がある。

★往生論註恩徳記では、「積成するにあたって、まず長行の如実讃嘆の文を引いて、所帰全て是れ能讃なることを示す。即ち、名体相即、本末円成、信行互融の妙旨を示さんとす。」とある。

この内容が頷けるように、「論註」を読むことができるかということが、課題となった。

○次に、「舎衛国所説の『無量寿経』（阿弥陀経）によれば、**仏**、阿弥陀如来の名号を解したまわく。」として次の経文が引用される。

「何がゆえぞ阿弥陀と号する。かの仏の光明無量にして、十方国を照らしたもうに障礙するところなし。このゆえに阿弥陀と号したてまつる」。

また、「かの仏の寿命およびその人民も、無量無辺阿僧祇なり。ゆえに阿弥陀と名づけたてまつる。」(1/4) が引かれる。

これは、前に（全書 279 頁）に「無量寿はこれ安楽浄土の如来の別号なり。釈迦牟尼仏、王舎城および舎衛国に在して、大衆の中にして無量寿仏の莊嚴功徳を説きたまえり。すなわち仏の名号をもって経の体となす」と、「無量寿」は『大経』、『観経』、『阿弥陀経』に通じた名であり体であることをすでに抑えている。そこで経の中で阿弥陀の名号を解しているこの『阿弥陀経』の文を「かの名義の如く」と天親が書かれた背景にあるものとして示してくれている。天親菩薩は第一行で「世尊」と初めに掲げ、第二行に「依修多羅」と表明され、それを曇鸞師は「願生に宗あり」「服するところ宗あり」と註釈されている。天親菩薩の「盡十方無碍光如来」の表現も仏解によるということを示される。

★往生論註恩徳記では、

「彼の仏の光明無量にして、十方国を照らしたもうに障礙するところなし。このゆえに阿弥陀と号したてまつる。」とは破闇の義を示す。初めは破闇の徳を明す。「照十方国無所障礙」とは即ち破闇の義を示す。能く一切衆生の無明を破す。故に無碍と云う。

後は満願の徳を顕す。即ち「彼の仏の寿命及其の人民も無量無辺等」とは寿命に約して満願の義を顕す。寿命無量は満願の極、彼仏の寿命、衆生に共す。これ即ち一切衆生の満願である。是の如く、光寿の体徳を以て阿弥陀の名を解するに依って、下の讃嘆門の積*に至って、破闇満願をもって仏の名義を釈したまうは全く、この仏解によるのである。このように書かれている。

*かの無碍光如来の名号は、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたもう。（論註ノート 66 頁、全書 314）

念仏のはたらきは「破闇・満願」ということだということは、若いころから聞いてきたことであるが、『阿弥陀経』の経文と初めてつながった。

○次に、問答がある。この問答は、無碍光の無碍の義を衆生に引き寄せてしめしてくれていると読ませてもらった。

「碍は衆生に属す。光の碍には非ざるなり」と示し、二つの喩をもって教えてくれる。光は満ち満ちているけれど、「盲者はみざるがごとし」。雨雲から雨は降り注いでいるけれども「頑石の潤わざるがごとし」。喩の意味はわかりやすい。この喩が具体的なあゆみの中で、「盲者」とは「頑石」とは、誰のことかと問いかけくる教えとして受け取っていくことが大切なことだと思った。

○問答に続いて、「もし一仏三千大千世界を主領すというは、これ声聞論の中の説なり。もし諸仏あまねく十方無量無辺世界を領すというは、これ大乘論の中の説なり」とある。

この文は何を示そうとして書かれているのかはわからないが、愚考してみると、引用された『阿弥陀経』の文の前半部分を問答で取り扱っているとすると、後半部分の内容と関係しているのではないかと考えてみた。

「論註」のはじめのほうに「この『無量寿経優婆提舍』は、けだし上衍（大乘）の極致」（聖全 279 頁）と抑えられていることからすると、「諸仏あまねく十方無量無辺世界を領す」ということが大切な言葉であると知れる。『大経』の上巻の終わりに華光出仏が説かれ、偈の中では「如来浄華の衆、正覚の華より化生す」（眷属功德）とある。阿弥陀のはたらきの中から諸仏が誕生する。誕生した諸仏が阿弥陀を讃嘆するその名号を聞いて諸有衆生が信心歓喜するという教えは常に聞くことであるが、「諸仏あまねく十方無量無辺世界を領す」とは、このようなことを示してくれているのではないだろうか。

○終わりに「天親菩薩、いま盡十方無碍光如来と言うは、すなわちこれかの如来の名による。かの如来の光明智相のごとく讃嘆するなり。ゆえに知んぬ、この句はこれ讃嘆門なり」と、今まで根拠として挙げた長行の文の示すところを『阿弥陀経』に尋ね、問答を施し、阿弥陀と諸仏の関係を示すことによって、天親菩薩が「盡十方無碍光如来」と言われているのが讃嘆門と言えると曇鸞師は釈を結ばれる。（私においては、未詳であるが、「信心決定して念仏申す」と教えられてきた内容がおさえられているのだろう）

2. 作願門について

○はじめに、曇鸞師は第一行の四句「願生安楽国」とは、即ちこれ作願門なりと定め、「天親菩薩の帰命の意なり」、また「安楽国」については後に述べる観察門の中にその義が示されている」と註釈している。

「帰命の意なり」と註釈する根拠は、長行の礼拝門に「彼国に生ずる意を為すが故に」（聖全 271 頁）とあり、この文によって「天親菩薩の帰命の意である」と釈したのである。

○続いて、二つの問答によって、願生の義を料簡（考えをめぐらす）している。

「論註」の中には問答が 29 ある。既に 2 つ出ている。一番目の問答は「我」について、

二番目が「無碍」についてであった。ここに出ている問答が三、四番目になる。

三番目の問いは「いかんぞ天親菩薩願生と言うや。」←願生がテーマ

四番目の問いは「何の義によってか往生と説くや。」←往生がテーマ

「願生偈」を勤行で読んでみると、「願生安楽国」で始まり（第一行）、「往生安楽国」（第二十四行）で終わることに気づき、どう違うのだろうかという素朴な問いが生じる。この問いを考えていく手がかりがここに示されているのだろうか。

前の問答の答えの文の中にある「天親菩薩の願ずるところの生は、これ因縁の義なり。因縁の義のゆえに仮に生と名づく。凡夫の実の衆生、実の生死ありというがごときには非ざるなり。」「因縁の義」というのがキーワードになるのではないか。「論註」の始めに「易行道とは、いわく、ただ信仏の因縁をもって浄土に生ぜんと願ず」とある。それ以外にも、後のほうに何か所か「因縁」の語が登場する。それらの文章を読んでいくことによって、ここでこの問答が出されていることの曇鸞師の意が窺えるのではないかと今は思っている。

後の問答の答えの中では「往」で顕される義を、穢土の人（仮に人と抑える）と浄土の人はまったく同一ではない、しかしまったく異なるものでもない。全く同一であれば因果がなく、全く異なれば相続ということがない。このように示してくれている。不一不異ということで、「因果」と「相続」ということが「往」ということで抑えられているように思う。この「因果」、「相続」という語も「論註」を読んでいくうえでキーワードになるだろうと予感している。

（以上 5月21日までの学びの報告）

（感想）

私の持っている古い「往生論註恩徳記」には、平成12年（2000年）の五月に行われた聖典に親しむ会で作成した資料が挟まっていた。それは、今回の担当の範囲のところを、上段に「往生論註恩徳記」の文、下段に夜晃先生が学ばれた「往生論註原要」の文を配置してあるだけの資料である。私が作成したものなのか、他の方の資料なのかは記憶がないが。

24年ぶりの再チャレンジとなった。寺岡一途師が読みやすく改定してくれたおかげで少しずつ、意味を考えながら読むことができるようになってきた。今回の報告は、この「往生論註恩徳記」の学びによるもので、難しい夜晃先生の文章を考え自分の言葉で表現できるところを記してみた。未消化なところ、誤解しているところ多々あると思うが、発表することによって皆様のご指導を仰ぎたいと思う。

一、本文と意訳

本文	意訳
<p>【総釈】 ①次に「優婆提舍」の名を成ず、又上を成じて下の偈を起す。(乃至) ②「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相応」と。 ③此の一行云何が「優婆提舍」の名を成じ、云何が上の三門を成じ下の二門を起こすや。(乃至)</p>	<p>①次に「優婆提舍」の名を完成し。また上の偈を成じて下の偈を起こす。 ②「我は、修多羅の真実功德相に依って、願生の偈を説き、偈を総持して仏教と相応します」と。 ③この一行は、どのように「優婆提舍」の名を完成し、どのように上の三門を成じ下の二門を起こすのか。</p>
<p>④偈に「我依修多羅、与仏教相応」と言まう。(乃至) ⑤「修多羅」は是れ仏經の名なり。我れ仏經の義を論じて、經と相応して、仏法の相に入るを以ての故に「優婆提舍」と名づくることを得。(乃至) ⑥名成じ竟んぬ。(乃至)</p>	<p>④偈に「我依修多羅、与仏教相応」と言っておられる。 ⑤「修多羅」は、仏の經の名称である。私は、仏の説かれたこの經のいわれを論じて、經の意と相応して、仏法のまことの相と一致しえたから、この論偈を「優婆提舍」と名づけることができるのである。 ⑥これで「優婆提舍」の名を成立しおわった。</p>
<p>⑦上の三門を成じて下の二門を起こす。何の所にか依る。何の故にか依る。如何が依る。 ⑧何の所に依るとは、修多羅に依る。 ⑨何の故にか依るとは、如来は即ち真実功德の相なるを以ての故に。 ⑩如何が依るとは、五念門を修して相応するが故に。</p>	<p>⑦どのようにして上の三門を完成して、下の二門を起こすかというに、偈の中の「依」には、何に依るか、なぜ依るか、どのように依るかということがある。 ⑧何に依るかといえば、修多羅によるのである。 ⑨なぜ依るかといえば、如来はとりもなおさず真実功德の相だからである。 ⑩どのように依るかといえば、五念門を修することによって仏の真実功德の相に相応することができるからである。</p>
<p>⑪上を成じて下を起こすこと竟んぬ。(乃至) 【別釈】 ⑫「修多羅」とは十二部經の中の直説の者を修多羅と名づく。謂わく、四阿含三蔵等なり。三蔵の外の大乗の諸經も亦修多羅と名づく。 ⑬此の中に「依修多羅」と言うは、是れ三蔵の外の大乗の修多羅なり。阿含等の經には非ざるなり。</p>	<p>⑪これで上を完成させて、下を起こすことを説明しおわる。 ⑫「修多羅」とは、十二部經の中で釈尊が直説されたものを修多羅という。つまり四阿含・三蔵などがこれである。三蔵以外の大乗の諸經も修多羅と名づける。 ⑬この偈の中で「修多羅に依る」というのは、三蔵以外の大乗の修多羅であり、阿含などの經ではない。</p>
<p>⑭「真実功德相」とは、二種の功德有</p>	<p>⑭「真実功德相」とは、功德に二種ある。</p>

り。

⑮一には、有漏の心より生じて、法性に順ぜず。所謂凡夫人天の諸善、人天の果報、若しくは因、若しくは果、皆是れ顛倒、皆是れ虚偽なり。是の故に不実の功德と名づく。

⑯二には、菩薩の智慧清浄の業より起こりて、仏事を莊嚴す。法性に依つて清浄の相に入る。是の法顛倒せず、虚偽ならず、名づけて真実功德と為す。如何が顛倒せざる。法性に依つて二諦に順ずるが故に。如何が虚偽ならざる。衆生を撰して畢竟浄に入らしむるが故に。

⑰「説願偈総持、与仏教相応」とは、「持」は不散不失に名づく。「総」は少を以て多を撰するに名づく。

「偈」の言は五言の句数なり。(乃至)「願」は往生を欲樂するに名づく。「説」は謂わく、諸の偈と論とを説くなり。(乃至)

⑱総じて之を言うに、願生する所の偈を説いて、仏教を総持して、仏教と相応するなり。(乃至)
⑲「(与仏教)相応」は、譬えば函と蓋と相い称えるが如しとなり。

⑮一には、煩惱が漏れ出る心から生じ、真理の法性に順じないものである。いわゆる凡夫である人天の世界の諸の善行、それによって起こる果報は、因であれ果であれ、みな真理に違い、みな虚偽である。だから真実でない功德というのである。

⑯二には、菩薩の智慧の清浄なる業(はたらき)から起こつて、仏の事業(いとなみ)をあらわす功德である。これは法性に依つて清浄なる相になつていく。この法は、法性の真理にかなひ、虚偽ではないから真実の功德という。どうして顛倒しないかという点、法性の真理にかなつていて二諦に順ずるからである。どうして虚偽でないかという点、衆生を撰して、ついに清らかな世界に入らしめるからである。

⑰「説願偈総持、与仏教相応」とは、「持」は散ぜず失わないことをいう。「総」は、少の中に多を撰めることをいう。

「偈」の言葉は、五言の句の数である。「願」は往生を願うことである。「説」は、つまり様々な偈と論を説くことである。

⑱まとめてこれを言うと、往生を願う偈を説くことによつて、仏の経をまとめて身につけ、仏の教えと相応するのである。

⑲「相応」は、譬えば函と蓋がぴったりとあうようなものである。

二、総釈

(一)、曇鸞が見いだした第二行の二つの意味

「第二行は、論主自ら、我れ仏經に依つて論を造つて仏教と相応す、**服する所宗有ることを述べ**。何が故ぞと云うならば、此れ**優婆提舎の名を成ぜん為**の故なり。亦是れ上の**三門を成じて下の二門を起こす**。所以に之に次いで説けり。」(五念門配釈 學習ノートp5)

- 「服する所宗有ることを述べ」
- ①「優婆提舎の名を成ぜん為」
- ②「上の三門を成じて下の二門を起こす」

- (二)、「服する所宗有ることを述べ」
- 「服する所」・・・天親菩薩が第一行の二尊の命に帰命されたこと
- 「宗有ることを述べ」・・・第二行

【宗とは】

○漢和辞典……宗……ウ……神殿 } 神や祖先を祭った御霊屋

示……神

尊・主・要

○天台智顛 「宗とは要なり」……いのちの中心・支え・拠り所・杖

○平野 修氏……成仏の可否……一切外道凡夫人に信仏の因縁に依って阿毘跋致が成就した

○曾我量深氏

「宗は一つの伝統であり、由って来る所であり、また帰着する所でもあります。その帰着する所は世界観であり、由来する所は歴史観であります。願生というものはこのように二つの意味を持つのであります。願生浄土という所に、単なる安心ではなくして、由って来る一つの歴史観があるのであります。浄土莊嚴は一つの世界観であり、名号は世界観である。また世界観の体であるといってもよいと思う。静かに世界観の意義を歴史的反省に依って世界観が正しいか、自己弁護のための理知的題目を並べているに過ぎないか、本当の歴史的体験であるかを反省するのが歴史観であります。」

・宗旨の義……帰着する所……世界観(浄土莊嚴・名号を体)……本願海

「廣大無碍の仏心に帰命すれば、仏心は帰命する一心の上に総持される。一心の中に仏心が開いてくる。本願に我々が帰命すれば、帰命する心の中に本願自身が自己をあらわす。それが二十九種莊嚴である。」(安田先生)

・宗承の義……伝統・由って来る所(天親の自説ではない)……歴史観(如来・諸仏善知識)

(三)、「優婆提舎の名を成ぜん為」

○曇鸞大師にとっての優婆提舎とは

「偈に我依修多羅 与仏教相应と言まう。修多羅は是れ仏經の名なり。我れ仏經の義を論じて經と相应して、**仏法の相に入るを以ての故に、優婆提舎と名づくることを得。**」

「仏の諸説、十二部經の中に論議經あり、優婆提舎と名づく。若しまた仏の諸の弟子、仏の經教を解して仏義と相应すれば、**仏また許して優婆提舎と名づく、仏法の相に入るを以ての故に。**」(学習ノートp3)

・「仏法の相に入るを以ての故に優婆提舎と名づくことを得」

○曇鸞の言う「仏法の相に入る」とは……構造的に捉えると

「釈迦牟尼仏、王舎城および舎衛国に在して、大衆の中にして無量寿仏の莊嚴功德を説きたまえり。すなわち仏の名号をもって經の体となす。」

「經とは常なり、言うところは安樂国土の仏および菩薩清浄莊嚴功德・国土清浄莊嚴功德、能く衆生のために大饒益を作す。常に世に行わるべきが故に名づけて經という。」

「天親菩薩、釈迦如来の像法の中に在まして釈迦如来の經教に順ず。」

「後の聖者、婆藪槃頭菩薩、如来大悲の教を服膺して、經に傍へて願生の偈を造れり。」

釈尊……無量寿の莊嚴功德を説く……無量寿經(名号が体)……十七願

常に行じて能く衆生のために大饒益を作す(教行)

(経は教えであり、教えは常に行じて、衆生の迷妄を破り転ずる)
・「世尊」・・・天親菩薩は仏滅千年後の像法時代に、生きた世尊に出遇った・・・経は生きてはたらく力を持つ

天親菩薩・・・経教に順ず **仏法の相に入る**・・・十八願成就(如来の三心が届く)(信)

大悲の教を服膺 ←(諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念)

「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」・・・一心帰命の念仏

(一心というは、教主世尊の御ことのをふたごころなくうたがいなしとなり。すなわちこれまことの信心なり。)

「観仏本眼力(阿弥陀仏を見る)」 尊号真像銘文(東518)

「願生安楽国」(証) (願生彼国 即得往生 住不退転)

・・・いよいよ浄土の智慧に照らされて生きる主体の誕生

「願生に宗有り」 ← 一心帰命願生のところに仏道が成就した

「服する所宗有り」 } ・・・**釈尊も天親も帰すべき世界は同じ(本願に帰す)**

○唯識三十頌の帰敬序「満分清浄者」・・・安田理深氏

・満・・・釈尊・如来・・・清浄者・・・經典(如来の大悲)

← 經典によって論が生まれ → 論によって經典の意味が明らかになる

・分・・・弟子・・・清浄者・・・論(如来の大悲) ※これを伝承という

「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相応」・・・無量寿経を優婆提舎した偈

・私に仏道を成就させた無量寿経の説く真実功德相、すなわち尽十方無碍光如来の智慧のはたらきを総持して造った願生偈は、仏の教えを着物のようにぴたと身につけて、寸分も外れるものではない(相応・函蓋)。だから優婆提舎(論議経)と名づけることができる。(天親の確信)

【親鸞の教行信証の誕生の原点を『論註』に見る】

教大無量寿経 真実の教 大経に説かれていた本願念仏往生浄土の教えこそ、真実の

浄土真宗 教えである、真に宗(人間の救いが成就する)が成り立つ道

だ。

←

その仏道とは教行真信証の仏道だ

顕真実教

顕真実行

顕真実信

顕真実証

顕真仏土

顕化身土

一 二 三 四 五 六

真仏土からの働きの仏道だ
自己を照らされ教化される仏道だ

【親鸞聖人の第二行の理解】：十七願として領解される

○行巻の引用(東P170)：成上起下の文以外は全て「乃至」

○『入出二門偈』(東P460)：第一行と第二行が逆(本願成就文の次第による)

「世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依って、
一心に尽十方無碍光如来に帰命したまえり。」：第十七願
第十八願

【安田理深先生】

「今、偈によって修多羅を総持し、総持することによって修多羅の教に相応せんと明言し、「説願偈総持 与仏教相応」と、造論の意図を明らかにする。経によって論を造り、論によって経の内容たる教に相応せんとするのであるが、その相応とは適うことである。同じものなら相応もないであろう。異なったものが一つというところに、伝承による己証を得、己証によって伝承を明らかにせんとするのである。(略)仏の教を繰り返すことが相応ではない。繰り返しは伝承ではない。自覚を明らかにすることが、相応の道だ」というのである。」

・伝承の己証、己証の伝承ということは、道綽の安樂集にいう、「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え。連続無窮にして、願はくは休止せざら使めんと欲す。無辺の生死海を尽くさんが為の故なり」ということか。天親の造論の意図は、「普共諸衆生 往生安樂国」ということなのだろう。浄土教は諸仏善知識の優婆提舎によって絶えることのない歴史となつて今に至っている。それは知恩報徳の歴史である。その最先端としての私のあり方が問われる。

(四)、「上の三門を成じて下の二門を起こす」(成上起下)：五念門の観点から第二行を見る
「上の三門を成じて下の二門を起こす。何の所にか依る。何の故にか依る。如何が依る。何の所に依るとは、修多羅に依る。何の故にか依るとは、如来は即ち真実功德の相なるを以ての故に。如何が依るとは、五念門を修して相応するが故に。上を成じて下を起こすこと竟んぬ。」：「依」に着目した註釈

○上三門：世尊我一心(諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念)

成上
・身業：礼拝門(自己への目覚め・懺悔・頭が下がる・ひざまずく)
・口業：讚嘆門(大いなる世界への目覚め・仰ぎ見る世界・勝過三界道)
・意業：作願門(念仏申し、涅槃からの声を聞いて生きよう)

○第二行：第一行の、一心帰命の念仏の救いには根柢がある：「我依」

①何の所にか依る(対象)：修多羅(無量寿経)

「迷っている者にとつては、何に依るかは分からない。人間の考えからは出てこない。そこに教というものの意味がある。迷っている者がさとる場合、その迷いをひるがえす手がかりは教の言葉である。迷っている人間がさとるためには、さとした人の言葉しか手がかりはない。それで教というのである。阿弥陀の本願というけれど

も、我々には不可称・不可説で手のかけようがない。だから、何に依るかというと修多羅に依る。なぜ依るか、真理だからである。〔安田理深氏〕

②何の故にか依る(理由)・・・如来は眞実功德相なるを以ての故に

「眞実功德の浄土からのほたらきが、天親菩薩の不実を照らし、如来こそ眞実でありましたと頭がさがった。その実体験が理由を決定する。〔安田理深氏〕

③云何が依る(方法)・・・五念門を修す(念仏申すこと)

「五念門を修すといっても称名念仏以外にない。南無阿弥陀仏と念仏申すところに、五念門の行がおさまっている。依るとは、仏道の実践である。念仏生活である。〔安田理深氏〕

「念仏申して生きていこうという念仏生活、それは、欲望や分別の迷いを超えた眞実功德を生きようという道であり、人間をやめる道である。信に死して願に生きるという新たな主体の歩みである。〔安田理深氏〕

起下

(法蔵菩薩の穢土でのご苦労を起こす)・・・上三門と下二門は質が異なる

・下二門・・・觀察門(智業)「智慧をして觀察したまえりき」

・浄土の因果を觀察

卷上「仏本何が故ぞこの願を起こしたもう」(因)

卷下「此れ云何が不思議なるや」(果)

回向門(方便智業)

「回向を首として、大悲心を成就することを得たまえる」

・仏の大悲心を共に生きる

三、別釈

(一)、修多羅とは

「修多羅とは十二部經の中の直説の者を修多羅と名づく。謂わく、四阿含三蔵等なり。三蔵の外の大乘の諸經も亦修多羅と名づく。此の中に依修多羅と言うは、是れ三蔵の外の大乘の修多羅なり。阿含等の經には非ざるなり。」

○曇鸞のいう大乘の修多羅は、「無量寿經」

「無量寿は是れ安樂浄土の如来の別号なり。釈迦牟尼仏王舎城及び舎衛国に在しまして、大衆の中にして、無量寿の莊嚴功德を説きたまえり。即ち仏の名号を以て經の体と為す。」

○尊号眞像銘文(東518)

「修多羅は天竺のことば、仏の經典をもうすなり。仏教に大乘あり、また小乗あり。みな修多羅ともうす。いま修多羅ともうすは大乘なり。小乗にはあらず。いまの三部の經典は大乘の修多羅なり。この大乘修多羅によるとなり。」

(二)、二種の眞実功德相とは

「眞実功德相とは、二種の功德有り。

一には、有漏の心より生じて、法性に順ぜず。所謂凡夫人天の諸善、人天の果報、若しは

因、若しは果、皆是れ顛倒、皆是れ虚偽なり。是の故に不実の功德と名づく。

一には、(法蔵)菩薩の智慧清浄の業より起りて、仏事を莊嚴す(衆生教化の事業を見事に行う)。法性に依つて清浄の相に入る。是の法顛倒せず、虚偽ならず、名づけて真実功德と為す。云何が顛倒せざる。法性に依つて二諦に順ずる(真諦を失わず俗諦に応ずる)が故に。云何が虚偽ならざる。衆生を撰して畢竟浄に入らしむる(転ずる)が故に。」

○なぜ真実功德相を不実功德と真実功德の二つで述べるのか

【夜晃先生の「往生論註恩徳記」の中の「原要」】

① 妙境をして解し易からしめんが為の故に。謂わく、真実功德不可思議なり。近く不実を形す。(不実の自己が分かれば真実の如来が分かる)

…真実と不実は異にして不二

② 非を捨て実に戻せしめんが為の故に。(転ずる)

③ 仏願の生起を顕す為の故に。(不実が出発点)

【曇鸞の真実功德相・論註の清浄功德では】

○ 仏願の生起…不実が出発点

・不実を照らすはたらき…自己とは何か知らされた(絶対否定)

「仏本この莊嚴功德を起したもう故は、三界はこれ虚偽の相、これ輪転の相、これ無窮の相にして、𧈧蟻循環するがごとく、蚕繭自ら縛わるがごとくなり。」

← 転じる

・真実に帰すはたらき…如来とは何か知らされた

「哀れなるかな衆生、この三界顛倒の不浄に締るるを見そなわして、衆生を不浄の処に、不輪転の処に、不無窮の処に置いて、畢竟安樂の大清浄処を得しめんと欲しめず。」

(延塚先生は、「この真実功德と不実功德のはたらきは、善導大師のところまでくると二種深信として表現されることになる」と言われる。)

【親鸞の真実功德相】

○ 尊号真像銘文(東518)…名号は本願の名乗り・本願の具体相

「真実功德相というは、**真実功德は誓願の尊号なり**。相はかたちということばなり。」

○ 一念多念文意(東543)…名号とは涅槃から穢土にはたらく如来そのもの

「**真実功德ともうすは、名号なり**。一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如来なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり。この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのりたまいて、無碍のちかきをおこしたまうをたねとして、阿弥陀仏と、なりたまえがゆえに、報身如来ともうすなり。これを尽十方無碍光如来となづけたてまつれるなり。この如来を、南無不可思議光仏ともうすなり。この如来を方便法身ともうすなり。方便ともうすは、かたちをあらわし、御なをしめして衆生にしらしめたもうをもうすな

り。すなわち、阿弥陀仏なり。この如来は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ、不可思議光仏ともうすなり。この如来、尽十方にみちみちたまえるがゆえに、無辺光仏ともうすなり。しかれば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。」

○一念多念文意(東544)

「**功德ともうすは、名号なり**。大宝海は、よろずの善根功德みちきわまるを、海にたとえたまう。この功德をよく信ずることのころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり。」

【夜晃先生の真実功德相】

○「讚嘆の詩」p455

「現実の生死は彼岸の浄土の声によって否定せられなくてはならないわれらはこの彼岸よりの声によってのみ 現実の煩惱生死を迷いと知り自己心内の一切を顛倒の妄見と知り得るのである

平等なる大悲 悪人をこそこの大悲 怨親平等の智慧光

逆悪の衆生を悉く一子と観じたもう仏心にふれて

いかにわれらが怨むべからざるを怨み

憎むべからざるを憎み 求むべからざるを求め

疑うべからざるに疑っているかを知らしめられて

遂に正しい信心に住し 念仏一行に乗托して

正しく浄土に欲生するのである。」

(三)説願偈総持 与仏教相應とは

「説願偈総持 与仏教相應とは、持は不散不失な名づく。総は少をもって多を撰するに名づく。偈の言は五言の句数なり。願は往生を欲樂するに名づく。説は謂わく、諸の偈と論を説くなり。総じてこれを言うに、願生する所の偈を説いて、仏教と相應するなり。相應とは、譬えば函と蓋と相い称えるが如しとなり。」

○持……不散不失(もらすものがない)

○総……少(願生偈)をもって多(無量寿經に説く真実功德相)を撰す

天親は、無量寿經の
説く法をもらさず偈
頌で説いた

○偈……五言の句数

○願……往生を欲樂する

○説……諸の偈と論を説く

【親鸞聖人】

「与仏教相應というは、世尊の教勅、弥陀の誓願にあいかなえりとなり。」

尊号真像銘文(東518)

「我修多羅・真実功德相に依って、願偈総持を説きて、仏教と相應**せり**(完了形)。」

行卷(東167)

【安田理深氏】

「信心歡喜乃至一念といった依って立つ大地を見いだすと、そこに信念が成り立つ。そこに初めて人生に責任をもつことができる。立場を見いだしたら、たとえ百万人であっても数では動かされぬことである。もつとも立場ができたということには、そこに終わらない意義がある。(略)得たところで腰を降ろせば、腰を降ろした途端になくなる。(略)問題は、その一点において世界に依えていくことである。(略)一点、それは何かというと他力回向である。それは全く賜ったものである。しかし、その一点を深め体系とするのは努力である。賜った一点において生き抜く、そこに努力というものがある。その一点を堅持していく。そのために体系(あるいは偈)というものが出てくるのである。(略)一点を持つ者は永遠不滅である。(略)一点は願である。法蔵の願心こそ一点である。(略)一点が(明らかにな)った)世界を総持するのである。」

・世尊我一心のところ、絶対不滅の動かぬ一点(法蔵菩薩の願心)を賜る。その一点において願心に依えていく。それは、その一点を体系化して総持する偈を造ること。

「願生偈は無量寿経の本願を総持する。天親が深広無涯底の本願に目覚めて、広大無碍の一心をもって帰命された。だから一心が広大無辺の本願を総持する。広大無碍の如来を総持するから、広大無碍の一心である。だから、偈文の内容は、一心を開いて二十九種莊嚴(願心の世界)を説くことになるのである。経に説かれているのは広大無碍の仏心である。その広大無碍の仏心に帰命すれば、仏心は帰命する一心の上に総持される。一心の中に仏心が開いてくる。本願に我々が帰命すれば、帰命する心の中に本願自身が自己をあらわす。それが二十九種莊嚴功德の世界である。(略)大経は本願を歌う。天親はその詩に依じて舞う。そういうものが偈というものである。(略)しかも偈には、総持という意味がある。総持するための方法が、少をもって偈するのである。」